

地域における育児グループの育成・支援のありかた

How to Bring Up and Support Childcare Groups in the Community

益 邑 千 草*

Chigusa Masumura

要約

近年、少子化の進行とともに、さまざまな育児グループの活動が見られ、孤立しがちな母親を支援するため、育児グループの果たす役割の重要性が認識されてきた。そのため、身近な行政組織として市町村が、育児グループの育成および活動存続の支援に計画的にかかわることの必要性が指摘され、さまざまな取り組みがなされている。

育児グループの育成・支援に行政がいかにかかわるべきか、東京都狛江市の育児グループ育成事業の例を紹介し、検討してみたい。

キーワード：育児グループ、育児サークル、育児不安、少子化

* 児童福祉学専攻

目 次

- I はじめに
- II 育児グループの定義と意義
 - 1 育児グループとは何か
 - 2 育児グループの自然発生過程
 - 3 少子化社会における育児グループの意義
 - 4 育児グループに対する子育て中の親のニーズ
- III 育児グループに対する行政の支援
 - 1 行政が育児グループの育成・存続を支援する意義
 - 2 育児グループの育成における行政の役割
 - 3 育児グループの活動の存続支援における行政の役割
 - 4 育児グループを活用するための積極的な支援について
- IV 狛江市における育児グループの育成
 - 1 狛江市の概略と母子保健事業
 - 2 狛江市における育児グループ育成の概要
 - 3 「ぼっかぼか広場」の指導の位置づけ
 - 4 「ぼっかぼか広場」の実際
 - 5 参加者の感想
 - 6 参加者の相談内容
 - 7 参加者の反応
 - 8 自主的なグループ活動への方向づけ
- V 狛江市における自主グループの動向について
 - 1 ぼっかぼか広場のOB
 - 2 ママパパ学級（両親学級）からのOB
 - 3 1、2を含む自主グループの動向
 - 4 交流会と活動状況の把握
 - 5 自主グループのPR
- VI 今後の課題について

I はじめに

近年、少子化の進行とともに、全国でさまざまな形態の育児グループが活動している。

育児グループや育児サークル、子育てグループや子育てサークルと呼ばれるものは、構成や運営のされかたなど、多様であるが、期待される役割は年々大きくなってきている。

ここでは、市町村という行政組織が、育児グループの育成および活動存続の支援に計画的にかかわる場合について、狛江市の例を紹介し、検討してみたい。

II 育児グループの定義と意義

1 育児グループとは何か

育児グループや育児サークル、子育てグループや子育てサークルなどと称しているもの、もしくはそのように呼ばれているものは、どのようなものであろうか。

そのようなグループの中には、メンバーどうしが必ずしも顔を合わせることがなく、機関誌やインターネットなどで情報を共有したり、交換したりすることが活動の中心となっているものもある。

本稿では、メンバーが継続的に集まる機会をもつことを活動の中心としているものを分析の対象とする。

子育て中の親（ほとんどは母親）がつくる数人から数十人くらいのグループで、子ども連れで集まって、子どもを遊ばせながら情報交換する会合をある程度定期的に開いていることを共通条件として、「育児グループ」と呼ぶことにする。

目的は、子どもの遊び相手を見つける、遊び場を確保する、育児に関する情報交換をする、ストレス解消をするなど、さまざまであろう。

2 育児グループの自然発生過程

子育ては疑問、不安の連続である。子どもの成長とともに、常に未知の体験をすることになるためである。また、子どもが運動能力を獲得し、行動範囲が広がるにつれ、戸外で遊ぶ、仲間と遊ぶことに欲求が高まり、家庭以外の遊び場や遊び仲間をさがすことになる。

自然に、つまり意識するかどうかにかかわらず、母親自身が相談相手を求め、子どもの遊び友だちを求めることにつながっていく。

近所どうしの立ち話の延長線上から、あるいは同じ産院でお産をした仲間や母親学級のOBなど何らかの出会いがきっかけで、自然発生的にグループができ、ある程度定期的に集まりを続ける。そのようなグループが次々と誕生し、子どもの成長とともに発展解消し、あるいは多少グループの性格を変えつつも10年以上続き……というような状態が各地で見られている。

さまざまな規模のグループがあるが、一度に集まれる人数、すなわち公園でいっしょに遊ぶ、集会室などを借りて遊ぶ場合の人数、グループ内で連絡を取ったり、意志疎通を図ったりするのにふさわしい人数などを考慮すると、グループの大きさには上限があるであろう。メンバーが転居したり、懐妊したり、さまざまな理由で休んだり、グループから離脱

したりして人数が少なくなりすぎると、自然消滅したり、単なる近所づきあいになったりして、グループではなくなるであろう。最小限ある程度の人数は必要である。

また、子どもが通園・通学するようになると、子連れで集まるには制約ができ、母親だけの集まりに移行するなど、時間的、つまり子どもの加齢による質的变化も共通の要素であろう。

自然の流れで集まることになった仲間を、どの段階から育児グループと呼ぶのか、を議論するより、実質的な分析を優先する意味で、上記のゆるやかな定義を考えてみる。

3 少子化社会における育児グループの意義

自然発生的にできた育児グループは、メンバーの考えかたで自由に運営すればよいわけで、仲良しの集まりとしてはなんら制約を受けることはないし、第三者がありかたを論ずる必要はないであろう。

昨今、敢えて育児グループなどの名前と呼ばれ、活動内容が注目されるのは、少子化の時代に、そのようなグループの果たす役割の重要性が認識されてきたためである。

すなわち、最近の子どもの数が少なくなった地域社会では、孤立しがちな母親を支援するためのひとつの場として育児グループが期待されているのである。

子育て中の母親にとって、隣近所に同じように子どもを育てている家庭が見あたらないとき、通いやすい距離にいろいろな月齢・年齢の育児グループが既に存在していて、気軽に合流できる状態であれば、しかもそのことについて適切な勧誘があれば、それまでグループの活動というものに全く興味がなかった人でも、有意義な選択肢となるであろう。

母親たちが自らそのような場を求めてグループづくりに取り組む場合には、グループをつくってみたいと望んでいる人がお互いに巡り会える機会が提供されることが望ましい。

更に、グループを維持運営する過程で、育児に関することで専門家の意見を求めたり、年齢に応じた遊びかたを習得するための助言を求めたりすることもあることなどから、外部の中立的な立場からの支援が必要である。

すなわち、市町村などの行政組織が、育児グループの育成および活動存続の支援に計画的にかかわることが必要になってきている。

4 育児グループに対する子育て中の親のニーズ

ある地方都市の育児グループの世話役をしている母親は、

「夫の転勤で引っ越してきたら、近所に育児グループがなかった。育児グループってどこでもあるものと思い込んでいたからびっくり。しかたなく、子育て中の人を自分で探してグループをつくってしまいました。」

と話していた。

子育て中の親にとって、育児グループというものは、かなり普遍的なニーズとなってきた。もちろん、子育てをめぐる条件はさまざまであり、第1子かどうか、祖父母と同居かどうか、共働きかどうか、親の性格、地域の環境など、条件によって必要度の差はあるであろう。しかし、外出がしにくいからといってインターネットで情報交換するだけでは補えない部分が必ず存在するのが子育てである。歩けるようになった子どもは「おんも」といって外へ行きたがり、年齢が上がるほど子どもの持つエネルギーを家の中だけで十分発散させることは困難になってくる。

保育園や幼稚園、小学校、あるいはおけいこごと等で、何らかの施設へ通うようになると、保護者どうしのつきあいができ、グループとしての活動に参加することもある。

従って、0歳から就学前、保育園や幼稚園などへの入園までの子どもを育てている親にとって、育児グループのニーズが高いと考えられる。

III 育児グループに対する行政の支援

1 行政が育児グループの育成・存続を支援する意義

上述のように、育児グループに対する外部からの支援を考えた場合、プライバシーをすることができる中立的な立場からの支援となると、公的な組織のかかわりが求められる。

少子化を背景に孤立しがちな母親を支援するため、育児グループの果たす役割の重要性が認識されるにつれて、身近な行政組織として市町村が、グループの育成および活動存続の支援に計画的にかかわることの必然性が指摘されている。

行政が事業としてかかわる場合には、

- ・育児グループの育成そのものを手助けする段階と、
- ・活動が続いているグループを支援する段階

がある。詳細は後述する。

その他、育児グループと行政のかかわりかたとしては、

- ・行政の実施する事業（両親学級、育児学級など）が契機となってグループができる
- ・行政の実施する事業をPRの場として利用する（参加者にちらしを配ってグループを紹介し勧誘をするなど）
- ・活動の場を借りる
- ・講師や指導者の紹介を求める

など、さまざまなかかわりがある。

2 育児グループの育成における行政の役割

行政の果たす役割としては

- 1) 育児グループの結成を目的として参加の呼びかけをし、場を準備する。
- 2) 行政が主導して何回か集まりをもつ。
- 3) グループの世話役や連絡方法を決めるなど、グループとして存続するための条件を整える手伝いをする。
- 4) 希望に応じて、公共施設を借りるための手続きを紹介したり、代行したりする。などがある。

3 育児グループの活動の存続支援における行政の役割

行政の果たす役割としては

- 1) 自主グループの活動の動向を把握する（定期的に活動の報告を受けるなど）。
- 2) グループの世話役やリーダーを養成するための研修会を開く。
- 3) グループの世話役やリーダーの相談に応じたり、専門的な助言をしたりするための会合を開く。
- 4) 希望に応じて、専門的な助言をしたりするための講師や相談者を派遣したりする。
- 5) 広報などで、グループの紹介をし、サークルに入りたいという希望者を仲介する。
- 6) グループ間の連絡やネットワークづくりを支援する。
- 7) グループの親子参加行事などに助成をする。などがある。

4 育児グループを活用するための積極的な支援について

育児グループの活動の存続に対する行政の支援のありかたとしては、更に上述の1)～7)のような支援を組み合わせ、行政が市（町村）内各地域ごとのグループの維持を積極的に図る場合もある。

地域ごとにある程度永続的な組織として存続するグループがあれば、育児不安を訴える人などを最寄りのグループへ勧誘して支援することができるためである。

育児不安が強い母親や、育児のしかたが不器用でしかも指導者からの助言がうまく受け入れられない母親などが、仲間の母親のやりかたを見習ったり、助言を受けたりできる。そういう母親の受け皿としてのグループを通いやすい身近なところにできるだけ準備しておくという考えかたである。少子化で身近に子育てのお手本がなく、ほとんどの母親が、育児下手の母親である今の時代には、何らかの形で育児グループが地域ごとに存在し、かつての若妻会のように、先輩の母親が後輩に教えたり、同輩どうしで支え合ったりできることが必要である。

そのためには、育児グループの運営管理のシステムが必要になる。

- ・活動状況を把握する（定期的に報告を求める）

- ・グループの代表者たるリーダーを養成する。
- ・リーダーにある程度運営の責任を持たせる。
- ・リーダーは常時参加者を惹きつける工夫をし、新しい人を受け入れるためのメンバーの理解が得られるように図る。
- ・参加者が入れ替わってもグループが存続できるように、リーダーの世代交代を援助する。
- ・グループがない地域においては、対象者を掘り起こし、グループの結成を呼びかける。

育児グループをある程度永続的な組織として存続させるという前提で、行政がどこまで支援するか、ある意味ではどこまで立ち入るか、干渉するか、またプライバシーとの関係が課題である。

グループの存続、新人の受け入れには、リーダーの資質が大きく影響するため、適当な人材をリーダーとし、グループ内でリーダーシップを発揮できるよう、支援することが重要になる。

グループがない地域において対象者を掘り起こすには、どこに赤ちゃんを抱えた“同志”がいるのかは母親にはわからないが、市町村は妊娠届や出生届などで情報を得ている。

行政がどこまで立ち入るかは、地域の必要性に応じて、ある程度枠組みは決めておく必要がある。

リーダーになってもらって、強力に支援しているうちに、母親の方が慣れてきてうまくいく場合もあれば、行政が立ち入り過ぎて壊れるグループもあるであろうし、ケースバイケースで対応する必要がある。これは、実は行政としてはこれまでやらなかった方式である。

ある対象者に普遍的に必要な対人サービスを供給する場合、ある程度整った形の組織を作り維持する、その方法は毎年毎月あるいは地域ごとに大きく変わることがないというのが従来の行政である。

子育ての支援において極めて柔軟な対応が求められていることに、どこまで現在の行政組織が気づき、対応しようと努力してくれるであろうか。

援助が欲しい人もあれば、要らないという人もある、しかし、欲しい人もどういった援助が欲しいのか自分でもわからないので、いろいろ用意して見せたり実演したりしなくてはならない、そうすれば要らないといった人もとても喜んで参加し、マイナスのことが予防できる、というような、まさに行政としてはこれまでやらなかった方式である。

IV 狛江市における育児グループの育成

筆者は、東京都狛江市において平成9年度から開始された育児グループの育成にかか

わっている^{(1),(2)}。

1 狛江市の概略と母子保健事業

狛江市は東京都の多摩地区にあるが、世田谷区に隣接し、市外電話番号も都心と同じ03で始まる地域である。面積は6.39 km²で全国で3番目に小さい市である。人口は77,378 (平成15年10月1日現在、推計。以下同様)、出生数は616 (平成14年) である。

市の財政規模は小さく、公共施設の整備や対人サービスは充実しているとはいえない。医療・保健・福祉の各分野で、隣接する調布市・世田谷区・川崎市に依存している部分が多い。

例えば、医療面では市の西端に慈恵医大第三病院があるが、路線バスの経路に近くに住む人以外の大部分の市民は利用しにくい。市の中央部よりやや南よりをほぼ東西に貫く小田急線の3つの駅に近い住民なら、私鉄を使って他市の病院へ通う方が便利な場合もある。

保健の行政区域では、狛江市と調布市を合わせて東京都の狛江調布保健所が管轄するが、福祉の面では、例えば児童相談所は、狛江市は世田谷区とともに世田谷児童相談所の管轄であって、調布市など4市の多摩児童相談所とは管轄が異なる。

母子保健事業において、母子保健法の改正により、平成9年度から狛江市が実施主体となって主な母子保健事業を実施しているが、隣接の調布市 (人口211,296) や世田谷区 (人口831,459) と比較すると (単位人口当たりの比較でも) ささやかな事業展開となっている。

2 狛江市における育児グループ育成の概要

狛江市において、母子保健事業のひとつとして平成9年度から開始された育児グループの育成指導事業「ぼっかばか広場」について、概略を紹介する。

本事業は、乳児を育てている親を対象とした1クール3回の短期の育児学級である。

親子のお遊び教室をベースとして、栄養・歯科・小児科の健康教育の場であり、個別の育児相談・育児指導を加味し、互いの連帯感を育成するものである。

事業終了後に自主的な育児グループとして活動を続けられるように、事業終了の時点でグループの結成を促すことを目的としている。事業終了後は、保健師の方でその活動状況をフォローしている。

対象者への周知方法は、主に、4カ月健診などにおける保健師による勧誘と、市の広報への記事の掲載である。

開催回数と期間については、平成9年度から12年度までは、各回20組ずつ、1クール3回で年4クールの実施であり、1組の親子を約3カ月間フォローしていた。

毎回20組を超える申し込みがあり、また、1クール3回では少ないので、もっと回数を

多くして欲しいなどと好評であった。

より多くの親子を受け入れるために、平成13年度以降は年5クールと実施回数を増やしている。しかし、1カ月強の間に3回実施する組もあるなど変則的であり、1組の親子をフォローする期間は短くなった。1クール3回では短すぎるという要望には逆行する形になっており、今後の検討を要する。

事業終了時に自主グループを結成しなかったことは今のところない。ほとんどの親子は、この事業で初めて出会っている。感想を書いてもらうと、毎回ほぼ全員が参加してよかったと書き、3回ではもの足りないので、継続して集まる場があれば参加したいという希望が多い。

図1は、狛江市における育児グループ指導事業「ぼっかぼか広場」の概要である。

市の窓口に着く勧誘用のリーフレットを複写したものである。

対象者への主な周知方法は、4カ月健診や予防接種などでの保健師による勧誘と、市の広報への記載である。友人や近所の知人で既に参加した人の評判を聞いたといわゆるクチコミで申し込む人もいる。

健診等の際に、保健師が特に声をかけて参加を促す場合もある。発達の遅れなど児の方にフォローの必要があるもの、母親の育児態度に心配な要素のあるもの、もしくはそれらの必要性を見極めるべきもの、などである。この場合は気軽に来てもらえる機会である点を活用している。

3 「ぼっかぼか広場」の指導の位置づけ

表1は、育児グループ指導の位置づけと実績である。

上述のように、平成12年度までは、20組ずつ、1クール3回で年4クールの実施であった。年間延べ12回の開催で、参加者は152人から236人であった。

平成13年度からは、年5クールと実施回数を増やしている。年間延べ15回の開催で、参加者は平成13年度では283人（平均1回18.9人）、平成14年度では254人（平均1回16.9人）であった。欠席の理由は乳児の体調によるやむをえぬものが多い。

4 「ぼっかぼか広場」の実際

表2に、「ぼっかぼか広場」の実際をまとめた。

指導にかかわるスタッフと指導内容は、1～3回の毎回かかわるのが、保健師と心理相談員（音楽療法士でもある）で、各回、歯科衛生士による歯みがきの話、栄養士による離乳食の話、小児科医師による健康の話が加わる。

好評なのが、音楽に合わせて親子で遊ぶ時間で、歌に合わせて赤ちゃんを抱いてやさしく揺するなど簡単な動作をするもの、簡単な手遊び、身のまわりのものをつかった発達を

平成15年度

ほっかほっか広場

対象 1歳までの赤ちゃんとお母さん

内容 育児の話（離乳食・乳歯・子育て全般…等）
歌・手あそび
子育て情報交換
子育て相談

日程

第1回	……	4月22日	・	5月6日	・	6月3日
第2回	……	6月24日	・	7月15日	・	8月5日
第3回	……	9月2日	・	9月30日	・	10月21日
第4回	……	11月4日	・	11月25日	・	12月16日
第5回	……	1月27日	・	2月24日	・	3月16日 (H.16)

時間 午前10時～12時

会場 狛江市健康相談所
1F 多目的ホール

定員 20組（予約制）

申し込み * 毎回広報にてお知らせ
(4/15号、6/15号、8/15号、10/15号、1/15号)
* 電話または直接あいとびあセンター窓口にて受付

もちもの
バスタオル
母子手帳
赤ちゃんの
飲み物等

❖ お問い合わせ ❖

狛江市役所 健康課（あいとびあセンター内）

☎ 03-3488-1181

図1 「ほっかほっか広場の概要

促進するような遊びを、音楽療法士の歌やかけ声、キーボード演奏に合わせて行う。

筆者は小児科医の立場から、集まった乳児の月齢に応じて、育児のポイントを20～30分程度、講話として話す。子どもたちが飽きて騒ぎ出した頃には終わるようにし、音楽療法の指導者と交代する。

親子の遊びが終わった後で、小グループに分かれて自由な話し合いの時間となる。この時間帯に個別相談に応じている。

表1 育児グループ育成事業の位置づけと実績

狛江市の母子保健事業 母子保健事業 健康教育 ① 母親学級（母性科） 省略 ② 母親学級（育児科） 根拠 母子保健法 目的 母親が乳児の健康、栄養等について理解することを目的とする。あわせて母親の子育てに対する不安解消及び情報交換の場となり、地域での自主グループをつくれるよう支援する。 対象 乳児と母親 内容 ・育児学級 年10回（詳細は省略） ・ぼっかぼか広場 月1回の3回コースで年4回開催。医師、保健師、栄養士、歯科衛生士、心理相談員による育児の話や相談、歌、手遊び、子育ての情報交換を行う。						
年 度	9	10	11	12	13	14
回 数	3回×4クール 延12回	12	12	12	3回×4クール 延15回	15
参加者	152	198	225	236	283	254

狛江市健康福祉部健康課「狛江市保健事業実績概要」を一部改変

表2 「ぼっかぼか広場」の内容

1	対象者	0歳児と保護者 各回20組
2	期間	1クール3回 年5クール
3	周知方法	狛江市の広報紙に紹介 狛江市保健センターの窓口や乳児健診会場などでちらしを配布 乳児健診などの際に保健師が個別に参加を勧奨
4	申し込み受付方法	電話による 先着順
5	開催場所	狛江市保健相談所 カーペット敷きのホール
6	スタッフ	毎回 : 音楽療法士（心理指導員）1名 保健師 1名 1回目～3回目各々 : 栄養士 1名 歯科衛生士 1名 小児科医師 1名
7	内容	毎回：親子遊び（実技指導） 発達に応じた遊び方・子どもへの接し方：音楽療法士（心理指導員） グループワーク : 保健師 個別相談 : 全スタッフ（それぞれの立場で） 1回目～3回目各々：離乳食について : 栄養士 歯みがきについて : 歯科衛生士 乳児期の子育てについて : 小児科医師 3回目：自主グループ結成の援助 : 保健師
8	使用する備品等	毎回：キーボード1台、おもちゃ各種、大きなキューピー人形1体（主に音楽療法士） 各回：それぞれのスタッフが使用 例：風船・お手玉など（音楽療法士） 歯ブラシ（歯科衛生士） 事故防止グッズなど（小児科医師）
9	配布資料	毎回：参加者の感想・希望・質問をまとめた資料（B4）1枚 最終回：参加者名簿（B4）1枚 （子どもと母親の氏名・住所・電話番号・人によりE-メールアドレスなど）

5 参加者の感想

参加者には、毎回手短かに感想や相談したいことを書いてもらっている。図2は、ある回の感想をまとめたものである。

赤ちゃん連れで外出する機会が少ないため、同じような月齢の赤ちゃんをみることでよかった、お母さん方の話が聞けてよかった、というような何組かの親子が集まることによる効果が第1段階としてみられる。

また、歯みがきや離乳食など、日頃知りたいと思っていたことが詳しく聞けてよかったという声は毎クールあり、小児科医の参加する回も、小さなことでかかりつけの医師に聞きにくかったことや、医師の説明でわかりにくかったことなどいろいろ聞けてよかったという感想が寄せられている。

6 参加者の相談内容

参加者から寄せられた「相談したいこと」はさまざまであるが、次のような課題がある。

- 1) 育児情報があふれているといわれる反面、必ずといっていいほど、同じ場面で同じ質問が出てくる。あらかじめ、健康教育の機会があるとよい。また相談窓口のPRも重要である。

例：乳児期の指しゃぶり（やめさせなくてよいのかなど）

夜泣き（運動不足か、運動させすぎかなど）

<h1>ぽっかぽか広場</h1>			
☆☆☆平成〇〇年〇月〇日（火）皆の声☆☆☆		色々なお話がきけるので、たいへん嬉しいです。たくさんお友達ができると良いです。	今まで家で2人っきりが多くて、毎日同じことのくり返しでしたが、ぽっかぽか広場は仲間がいるし、目新しい遊びができるので、母子共に楽しめます。
歌って踊って楽しい（母） お友達がいっぱい楽しい（子）	歌あそびが楽しかった。家ではやったことがなかったので、早速歌ってあげたいです。いろいろな種類の歌を教えてください。	“ピョンピョン”かえるが楽しかったみたいで声を出して笑っていました。遊びのネタが増えそうなので、次回楽しみにしています。	毎日、子どもと2人の時間が長いので、親子ともいろんな方に出会えて楽しかったです。体を使って皆でするダンスは大喜びでした。
いろいろな人と、お話できて楽しかったです。これからもいろいろな遊びを教わって家でもがらばりたい。	情報交換ができて楽しいです。母乳や離乳食など悩みはつきませんが、みんな同じ体験をすると思うと心強いです。	いろいろな遊びを知ることができてよかったです。また、近くにも同じ子どものいるお母さんがいることがわかりました。	有り難うございました。時間帯が午後なら良かったです。おっぱい、離乳食、家事と忙しいので。
また、いろいろな歌を教えてほしいです。	お歌遊びがとても楽しかったです。	☆感想 とても楽しかったです。いろいろな遊びを教えてください。	近所の方といろんなことを話せて楽しかったです。次回も楽しみです。
お歌あそびが楽しかったです。早速、お家でやってみま〜す。離乳食・歯のお話をたくさんしてほしいです。	子供の為に遊んであげたいが、体力がついていかなかった。（家では特にそうになってしまう）	皆さんは、日中赤ちゃんとは2人で過ごされていると思います。何を遊んでいらっしゃるのですか。	皆さん楽しめたようでよかったです。次回は〇月〇日（火）小児科の先生のお話がありますので楽しみにしていて下さいネ!!

（1クール3回のうち、2回目終了時のアンケート。プライバシー保護のため、一部改変）

図2 「ぽっかぽか広場」参加者の感想

離乳食初期の対応（うんちにそのまま出てくるので中止した）

- 2) 医療機関での指導に問題がある可能性が高い場合について、公的機関による対応が必要である

例：質問をすると叱られるので怖い（複数の母親からの訴え）

乳児期早期から抗アレルギー剤を予防内服している（母親は喘息を予防できると思っており、インフォームド・コンセントがとれていない）

7 参加者の反応

「ぼっかぼか広場」参加者の反応は、さまざまであるが、表3にいくつかのエピソードを挙げた。

8 自主的なグループ活動への方向づけ

1) 参加者名簿の作成

各クールの最終回には、参加者の名簿を配布する（2回目のときに住所氏名を用紙に記入してもらっている）。地区毎の小グループ懇談なども経験しており、顔見知りから親しい仲までつながりができているので、プライバシーを知られたくないといって加わらない人は今まではなかった。今後も仲間と連絡がとれることになる。

2) 自主グループ結成の促進

① 自主グループをつくることにする

担当保健師が自主グループの結成を呼びかける。

「みんなで集まってみてはどうですか。」という比較的マイルドな勧誘である。

「そうねえ……。」とお互い顔を見合わせる段階から、徐々に話がまとまっていく。

自主グループ結成に結びつかなかったことは、今までにはない。

保健師が、次回、参加者だけで集まる会合の日程を希望にそって決め、集合場所にする市の施設の使用予約まで援助している。

② 会の名称を決める

会場の予約には、会の名称と代表者名が必要なので、漠然と「自主グループをつくってもいいわねえ」という段階になれば、すぐにそれらを決めなければならない。

会の名称は、なじみやすい、おぼえやすい短いものがよいが、既成の自主グループの名と重ならないようにしなければならないので、保健師の誘導が必要である。全員が気に入るものを思いつくのは不可能なので、多少強引に名称を決めてもらう。

表3 「ぼっかぼか広場」参加者の反応

(1) おしゃべりの機会に飢えている

小児科医の話が終わり、音楽療法の指導者と交代し、親子の遊びが始まる。車座になって歌いながら、親子でスキンシップや手遊びを何種類かして、ひとしきり楽しんだ後、指導者はキーボードで軽快な曲を弾き始め、「さあ、子どもを抱いて立ち上がって自由に歩いてください。合図をしたらご挨拶ですよ」と促す。

たいていの場合、ほっとしたように立ち上がり笑いさざめきながら歩き出す。曲調が変わったところで「さあ、こんにちをしましょう！」と声がかかり、赤ちゃんどうし、おじぎをさせたりし、また歩き出す、というのをしばらく繰り返す。

ところが、立ち上がるなり、音楽も合図の声も耳に入らず、声高に立ち話が始まる時があり、スタッフはみな顔を見合わせるばかりとなる。母親たちは毎回「音楽に合わせた遊びがおもしろかった、次回も楽しみにしている」と感想を寄せてくれるが……。「よほど、ストレスたまっているのね」と指導者がため息をつく。

ごくありふれた井戸端会議まで、行政がおんぶにだっこで用意してあげなければならない時代になっている。「昔は、軒先におむつを干していたら赤ちゃんのいる家だとすぐにわかった」。赤ちゃんのいる家を探すのが個人の力では難しくなり、地域の生活における生き活きとした子育てが困難になっている。発想を変えた援助が必要である。

(2) マニュアルがないと子どもと遊べない

マスコミで「いないいないばあー」ができない母親が多くなったといわれている。

簡単な歌に合わせて、赤ちゃんの手や足を持ち上げたり、さすったりというような、ごく単純な遊びに対してさえ、「子どもとの遊び方がわからなかったので助かった」という感想が寄せられる。

その場でおぼえられる簡単な遊びでも、ごちなくまねするのがやっという母親、子どもと同じレベルでにこにこしたり、大げさな身振りをしたりするのが照れくさくて苦手であるという母親が少なくない。

要領さえわかれば、自分の好きな歌でも、即興の鼻歌でも、あり合わせの童謡のCDでも何でもいいのだが、感想を書いてもらうと「楽譜のコピーを配ってください」「先生の歌のCDは売ってませんか」などの声がある。

母親たちはからだに遊びが染み込んでいないのではないか、小さい頃「子どもらしく」存分に遊んでいないのではないかと思われる。「どんな遊びをしたの？ 百面相したことないの？」と問いたくなるほどで、「童心に返って」といわれても、返るべき童心がないのではないか、まず、お母さんたちを遊ばせる機会を作るべきかもしれないと考えてしまう。

赤ちゃんと同じレベルで濃厚に遊ぶことは、母親にとってごく自然のストレス解消の機会でもあるのだが、それが恥ずかしいことようになってきているのは、どこでボタンをかけちがえたのか。無防備で遊べるなんて、すばらしい特権ではないかと思うのだが。

(3) マニュアルがあっても独特のフィルターを通して理解する

6か月の赤ちゃんを抱いた母親。「産院を退院してから、一度もおへそを洗ったことがないんですけど、これでいいんでしょうか」

ごく普通の理解の良さそうな母親で、退院時指導では、おへその手入れのことはいわれなかった、むやみにおへそをいじってはいけないというのは何度も聞いたという。離乳食とか、スキンケアとか、他のことには詳しい。

黒い塊がたっぷり詰まったおへそで幸いトラブルは起こしていなかった。おふろあがりの手入れを説明すると、ぱっと明るい表情になりうれしそうに帰っていった。

わかっているはず、なのに意外にわかっていないことが多いとよくいわれるが、その程度が非常に極端になっているように思われる。

③ 代表者を決める

次に、当座の代表者（世話役）を出席者の中から2名選ぶ。それとなく打診しておいたりして引き受けてもらっている。

④ 会場を予約する

会場はメンバーが利用した経験のある場所の希望が多く、この事業と同じ保健相談所や、健診に使う保健センター等の市の施設になる。

多少時間がかかっても次回のため、保健師が代表者に付き添って会場の予約をすることで話合いが進む。ほとんどの人が必要性を感じているようであり、「これまでも、皆さん集まりを続けてますよ……」という保健師の勧奨に比較的素直に応じている。

ただ、意欲はあっても、乳飲み子を抱えての外出は天候にも左右されるし、移動もままならない状態であるため、1月先の予定はなかなか立たない。ましてや世話役を引き受けて大丈夫かしらと不安になる様子がありありとわかる場合も少なくない。保健師も代表者の人選にはたいへん苦労している。

これ以降は、お母さんたちの自主的な運営に任される。

以後の自主的な集まりの動向は、行政側が積極的に把握しようとしなければつかめない（市の施設を使っている場合は、予約状況から間接的に把握できるが）。

V 狛江市における自主グループの動向について

「ぼっかぼか広場」のOBを含めて、狛江市健康課で把握している自主グループ（育児グループ）の動向について、平成14年11月現在、狛江市健康課の担当保健師からの情報をまとめた。

1 ぼっかぼか広場のOB

事業の終了後第1回は、担当の保健師が予約の世話をした場所で集まる。その後は日時場所とも自分たちで決め、自主的に集まっているが、寒い時期は（公園などではなく）市の施設を使うことが多いので、部屋の予約状況から活動状況を把握している。

平成13年度の5グループは、いずれも14年度も活動中である。だいたい20組から10組くらいに減少しながら続いている。5、6組の親子だけになりながら続いているグループもある。

2 ママパパ学級（両親学級）からのOB

平成9年度の移管の前年からのママパパ学級OBが、一番ふるいので、子どもは年長組になっている（5歳児クラス）。

3 1、2を含む自主グループの動向

子どもが幼稚園に入ると抜けていく傾向があるが、第2子が生まれたりして、続いていることも多い。

週1回のところもあれば、月に2回、月に1回のところもある。

ぼっかぼか広場の会場である保健相談所をつかうことが多い。

お花見など行事をしているところもある。

4 交流会と活動状況の把握

年に1回、グループの代表に集まってもらって、交流会を実施している。グループ間の情報交換もしている。

14年度は9月に実施した。保健師がグループ内の相談にのり、市への要望もきいている。

「保健師さんの話が聞きたい」という要請により、近く初めて保健師がグループの会合に出る予定である。欠席のグループにはアンケート用紙を郵送する。回答の返送がないときは、電話で問い合わせしている。

5 自主グループのPR

年に1度の健康まつり（市の健康センター「あいとぴあ」で開催）のときに、一般市民に対して、各自主グループを紹介している。入会の希望を受け付けている。ポスターを見たり、保健師の説明を聞いて、そういうグループがあるなら参加してみたいと、入会を希望し、参加する人もある。

ただし、グループによっては、途中から新しい人を入れるのは抵抗がある場合もあり、むずかしい問題を抱えている。上記の自主グループの紹介は、新規のメンバーを受け入れることに同意したグループのみである。

平成14年度の状況は、表4を参照。

VI 今後の課題について

行政が育児グループの育成にどこまでかかわるべきか、どんなグループを育成するのか、また、育成したグループをどのように支援していくのか、という検討は常に必要である。

既に全国でいろいろな育児グループ、育児サークルが生まれ、活動しており、様々な分析が試みられているが、多少の混乱も見られる⁽³⁾。

上述のように、自然発生的な仲良しグループが、和気藹々と楽しい時間を過ごすのに特別の理論は不要であるが、大人どうしの趣味のグループなどと異なる点は、乳幼児を育てる過程で必ず未経験の課題に突き当たるということである。

メンバーの側からすれば、必要に応じて、育児について何らかの助言を気軽に求めることができる方が望ましい。その際に内容によって専門家の助言が必要となる。

また、グループの外にいる者の側からすれば、育児不安を訴えたり、仲間を求めたりしている母親のために、身近なところに既成のグループがあり、しかも新しいメンバーを受け入れてくれることが理想である。

表4 育児自主グループ一覧表（狛江市）

グループ名	子どもの年齢	メンバー数	主な活動場所	活動日時
A	4カ月～5歳9カ月	母10人・子24人	健康相談所	3回/月 (水)PM
B クラブ	4歳1～9カ月	母26人・子26人	公園・その他	4回位/年
C 広場	3歳7カ月～4歳4カ月	母12人・子20人	レストランなど	不定期
D のみかた	6カ月～3歳10カ月	母15人・子20人	健康相談所	1回/月 PM
E	2歳5カ月～3歳3カ月	母29人・子35人	健康相談所	1回/月
F くらぶ	2歳5カ月～3歳	母10人・子11人	健康相談所・公園・多摩川	2回/月 (木)PM
G ベイビー	4カ月～2歳5カ月	母28人・子30人	健康相談所	2回/月 AM・PM
H クラブ	1歳7カ月～2歳6カ月	母6人・子6人	健康相談所	1回/月 AM
I	1歳7カ月～2歳1カ月	母15人・子15人	健康相談所	1～2回/月 PM
J	1歳2カ月～1歳8カ月	母17人・子17人	健康相談所	1回/月
K のマーチ	1歳1カ月～1歳7カ月	母22人・子23人	健康相談所	2回/月 AM・PM
L の会	1歳～1歳3カ月	母16人・子17人	健康相談所	1回/月 PM
M	8カ月～10カ月	母18人・子18人	健康相談所	1～2回/月 AM
N	8カ月～1歳2カ月	母18人・子18人	健康相談所	1回/月 AM
O ちゃんの家	7カ月～9カ月	母15人・子15人	健康相談所	2回/月 (金)PM
P キッズクラブ (ふたご・みつごの家)	現在妊娠中の方～5歳8カ月	20組	健康相談所	1回/2カ月 (水)PM

(平成14年10月現在。プライバシー保護のため、一部改変)

人口密度の高い都会でさえ、近所に子どものいる家庭がほとんどないというような少子化の時代には、育児中の母親たちが、仲良しグループを“自然発生”させることが難しくなり、一方では、できたグループにそれなりの役割を期待せざるを得ない、社会の要請が存在する。

自然発生した仲良しグループが、新しい仲間を入れて欲しいなどと外から干渉されることを素直に受け入れるとは限らないし、行政が育成したグループがどのように支援していても立ち消えになっていく可能性もあるわけで、常にジレンマが立ちはだかる。

引き続き、他の地域の行政が支援する育児サークル（山形県酒田市）などと比較検討していきたい。

参考文献

- (1) 益邑千草「狛江市における育児グループ指導(1)」療育研究小児科医会報 No.8, 2001, 19-24
- (2) 益邑千草「狛江市における育児グループ指導(2)」療育研究小児科医会報, No.9, 2002, 7-11
- (3) 川谷和子「地域における育児支援グループ」周産期医学 Vol 32, 2002, 710-714